

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520758

研究課題名(和文) 国体と仏教 - 日本近代史における仏教の再定位に向けて

研究課題名(英文) Kokutai and Buddhism : Towards a Balanced Perspective of Buddhism in Modern Japanese History.

研究代表者

山口 輝臣 (Yamaguchi, Teruomi)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20314974

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：まず、近代日本における仏教者、具体的には、島地黙雷と釈宗演について、簡潔な評伝を発表した。前者については、とくに政教分離とキリスト教への対抗との関わりに力点を置いた。次に、大正期における天皇による大師号宣下を素材に、仏教による国家への働きかけの諸相を明らかにした。最後に、明治後期から昭和前期における国体の位相と機能を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：First, I wrote brief biographies of Shimaji Mokurai and Shaku Soen. Second, I revealed several aspects of outreach to the nation by Buddhism in Taisho Period. Finally, I presented some phases and functions of Kokutai from late Meiji to early Showa Period.

研究分野：日本近代史

キーワード：仏教 国体 政教分離 宗教学 憲法 島地黙雷

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、近代日本における国家と宗教との関係を、一次史料に基づいた政策にかかわる政治史的研究と、政策を支持したり批判したりする言説の次元についての思想史的研究とを統合する形でやってきた。明治期については『明治国家と宗教』（東京大学出版会、1999年）、大正期に関しては『明治神宮の出現』（吉川弘文館、2005年）などである。これらを通じ、国家神道の形成・展開・崩壊（あるいは残存）という既存の理解に対し、明治維新決定論に陥っている点、対象が神社のみに局限されている点などを批判し、次のような像を対置してきた。明治になってキリスト教とともに宗教という概念が定着していく過程で、藩閥政府は神仏を非宗教と宗教とに区分していく。それが20世紀に入り、民主化の進展と政教分離という発想の一般化によって、かえって非宗教とされた神社が国家と結びつき、ついには信仰を抑圧する事態を招く。国家神道とは、20世紀に出現したこうした事態を否定するために、GHQが採用した用語である。

以上の検討作業のなかで、仏教の果たした役割の大きさを理解するに至り、『信教自由』と『国禁』（島海靖編『日本立憲政治の形成と変質』吉川弘文館、2005年）以降、仏教に焦点を定めた論文をいくつか発表してきた。ところが近代日本における国家と仏教との関係についての先行研究には、国内外を問わず、大きなバイアスが存在することに気付いた。その点を克服したいというのが、研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

近代日本にとって仏教とは何であったのか？ このいささか茫漠とした問いへ迫るといふ全体構想のもと、本研究では、教育勅語で使用され、大日本帝国憲法を支える役割を果たした国体なるものをとりあげ、それと仏教との関わりの軌跡を検討する。具体的には、主として島地黙雷と里見岸雄という二人の仏教者の国体に関する言動を詳細に分析する。それにより、①仏教が国体とどのような関係を取り結ぼうとしたのかを明らかにし、さらに、②国家と仏教との関係史について、国家神道を介在させた従来の理解とは異なる像を提示する。そしてこれらの作業を通じて、日本近代史における仏教の再定位に向けた基盤を整備することを目的とする。

従来の研究は、廃仏毀釈を中心とした明治初年へと集中するとともに、そのほとんどが「仏教と国家神道」という枠組によって遂行されてきた。その最大の問題点は、国家神道

という戦前にはほとんど使われることのなかった概念を遡及させて使用する点にある。たとえば、仏教者が国家神道をどのように捉えていたのかと問うてみても、その国家神道なるものを研究者がそれぞれに措定している以上、史料に基づいて説得的に答えることは不可能に近い。史料研究が精緻になればなるほど、研究と枠組との乖離が甚だしくなってしまうのだ。これでは、国家と宗教との関係についての最先端の研究とまともな対話をするにすら難しい。そのためにはどうしても方法的な転換が要請される。本研究では、そうした転換により、「仏教のある日本近代史」を描けるようにすることを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、史料中に頻出する国体という語を軸に、それについての仏教者らの言動を精密に再構成するという方法を採用する。

国体への着眼は、共著『天皇と宗教』（講談社、2011年）を執筆していくなかで、仏教者の国体論が数多く存在することに気づいたことに基づく。国体については、尾藤正英「水戸学の特質」（『日本思想体系』53、岩波書店、1973年）を最高峰とする系譜的研究の影響が強いせいか、国体論を高唱した仏教者がいたことに注意を払ってこなかった。そもそも近代の国体論にさしたる価値はないと、その内容分析は放置されてきた感がある。だが天皇を現人神と明言した『国体の本義』にも、「我が国は大乗相応の地」といった言葉があるように、国体のなかで仏教は確固たる地位を占めていたのであり、こうした点を無視して、国家と仏教との関係を明らかにすることは到底できまい。

よって、国家神道という分析概念ではなく、国体という歴史用語を軸に、それについての仏教者たちの思索と実践の軌跡を詳細にあとづけることで、仏教は国体とどのような関係を取り結ぼうとし、それは実現したのかどうかを明らかにし、それにより国家と仏教との関係史について、国家神道を介在させた従来の理解とは異なる像を構想する。

4. 研究成果

(1) 近代日本における仏教者について、簡潔な評伝を発表した。

一人は、島地黙雷である。黙雷が、明治零年代の仏教をはじめとする宗教と国家との関係の定位に大きな影響力を発揮したことは、すでに良く知られている。ただその評価は区々である。この点について、これまで使われてこなかった黙雷の生家に残された書翰なども参照することで、次のことが明ら

かになった。黙雷の政教分離の主張は、宗教という新たな概念を受け入れた上で、キリスト教に対抗するという目的のもとに構成されていたこと、そしてその点が、キリスト教への禁教政策をもはや維持できず、その趨勢を宗教者の力量に任せるほかなくなりつつあった明治政府に受け容れやすかったこと、である。黙雷の後半生など、紙幅の関係もあって不十分なところが残ったが、明治前期における仏教が国家とどのような関係を取り結ぼうとしたのかを明らかにできたと考える。

もう一人は釈宗演である。宗演については、かれによる巧みなメディア利用を強調することで、近代における仏教を考察する新たな視角の提示も試みた。

(2) 仏教による国家への働きかけの諸相を明らかにした。

島地黙雷がそうであったように、仏教はしばしば自らの希望を実現すべく、国家へと運動を試みた。その事例として、大正期に、日蓮に対して天皇より大師号を宣下させようという運動の論理と行動を検討した。天皇は僧侶に師号を授与する権能を有していたが、自発的に行うことはなく、宣下には運動が不可欠であった。国体論に一家言を有する日蓮主義者が中心となったこの運動を通じて、仏教と国家・国体との複雑な様相を浮き彫りにした。

(3) 明治後期から昭和前期における国体の位相と機能を明らかにした。

国体という同じ言葉について論じていても、明治前期と昭和前期とでは、その内容は大幅に異なる。その間に起きた変化の様相を、同時代の言論史料などから検討した。その結果、おおよそ明治末頃には、「我が国体」に関する曖昧かつ最低限のイメージを共有しながら、各論者がさまざまに「正しい国体」を提示するような言論空間が成立していたこと、そうした空間が、一方では国体を否定する言論の出現、他方ではそれに対抗する国体の法制度化によって崩壊していくという見通しを示した。このうち、前半部分はずでに公刊済みであり、後半部分に関しては、里見岸雄の分析を交え、まもなく発表の予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

1. 山口輝臣、「釈宗演」、『歴史と地理』、248、

2015年、29-34頁、査読なし

2. 山口輝臣、「天津教古文書の増殖」、『日本歴史』、800、2015年、138-141頁、査読なし

3. 山口輝臣、「天皇と日蓮—大正11年の立正大師号宣下をめぐる—」、『日本歴史』、770、2012年、1-7頁、査読なし

[学会発表] (計 2件)

1. 山口輝臣、「何をとりあげると日本宗教史になるのか?」、「20世紀と日本」研究会、2014年8月、宝塚商工会議所(兵庫県宝塚市)

2. Yamaguchi Teruomi、Rituals and Faith within the Imperial Family: The Establishment of Shinto Court Ceremonies and the “Renaissance” of Buddhism、International Convention of Asia Scholars (ICAS)、2013年6月、Macao (China)

[図書] (計 2件)

1. 酒井哲哉(編)、大久保健晴・山口輝臣・春名展生・松田宏一郎・芝崎厚士・辛島理人・中島岳志・小畑郁・道場親信・川島真、『日本の外交・第3巻・外交思想』、岩波書店、2013年、49-70頁、(担当:「なぜ国体だったのか?」)

2. 山口輝臣、『島地黙雷—「政教分離」をもたらした僧侶』、山川出版社、2013年、1-98頁

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0件)

名称:
発明者:
権利者:

種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

山口 輝臣 (Yamaguchi Teruomi)
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：20314974

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号：